

川鶴次郎

浅草物語

新 浅 草 物 語

1977年 7 月15日 発行

¥ 1,500

著 者 窪 川 鶴 次 郎

発行者 田 島 義 明

印刷所 太 平 印 刷 社

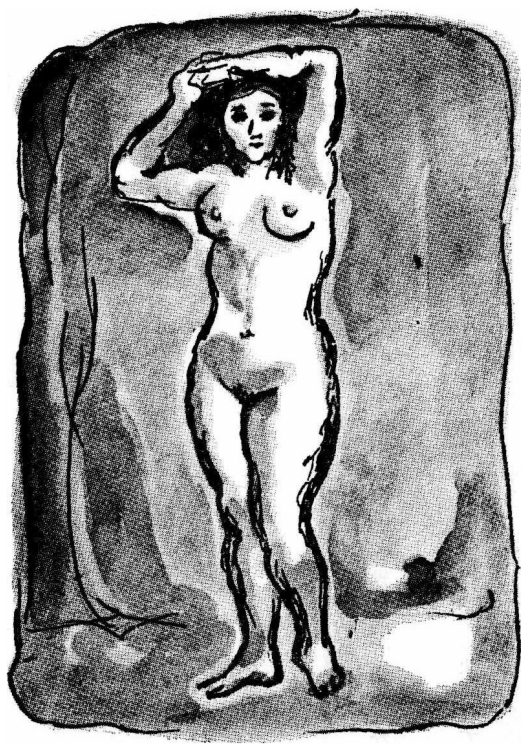
製 本 黒 田 製 本 所

発行所 造 形 社

東京都世田谷区南烏山5-23-7

TEL 300-4016 振替東京 7-363

(分)1093 (製)60872 (出)4231



序 曲 花 ぐ し

序 曲 花 櫛

一

わたしがはじめて浅草へ行ったのは大正九年の春であった。

麹町八丁目の叔母の家からどういうふうにしていったのかおぼえていない。わたしの頭には、雷門と仲見世と観音さま、それから金龍館だけが浅草としてのこっている。なぜ金龍館だけを見たのか、それもわからない。

しかしおかげでわたしは、後の世に語りつたえられるようになった金龍館の、その全盛時代をかいま見ることができたわけである。そして大正十二年の震災で金龍館が永久になくなってしまいうまで、ふたたび見る機会がなかった。

——はじめて見る東京の山の手は、三月末のつめたい雨にびしょびしょ濡れていた。どこか医者の学校の入学試験を受けるための兄といっしょについてきた弟のわたしとを乗せた電車は、ずっと斜面の下の方に堀の水の見える三宅坂をゆるやかにのぼりながら半蔵門を四谷の方にまがっていった。柳はもう芽ぶいていたが、田舎育ちで防寒具など身につけたことのないわたしたちは、ニコニ

コがすりに小倉の袴でふるえていた。

麹町八丁目の停留所でおいて、白いのれんに黒い字でミルクホールとかいてある店が目じるしになつてゐる横町を右へはいると、空地に面した右側の角に二人の叔母の住んでゐる二階家があつた。空地にむかつた高いへいの上に椎の木が一本さしてゐる。格子戸の中は白い障子がひっそりとしてゐる。東京の人たちはこういう生活をしてゐるのかと、わたしの心までしんとした。

しかしそれよりもわたしの心にいつまでも消えることなくしみついた東京の印象は、玄關の三疊から左のうす暗い六疊の部屋にはいつたとき、わたしの全身をつんだ未知のにおいであつた。小さな火鉢と小さな茶棚の上にかさねた長仏壇、このこじんまりとした部屋にこもつてゐるにおいは何なのだろう。線香のほい、しかしそれだけではない。それにはおみおつけのにおいがまじつてゐるらしい。東京でこういうにおいのする家は、どういふ暮しをしてゐるのだろう。

ずっと後年になつてわかつたが、それは下町の商家や水商売の家の、奥まつた茶の間の朝夕の生活に特有のものであつた。縁先のへいにつかえるような小さな庭には、八ッ手と青木がしげつてゐる。青木の葉かげにはまだ冬の名残りを見せた真赤な実が雨につやつと濡れてゐる。きれいな水を一ぱい張つた手洗鉢とその上にさがつてゐる手ぬぐい。これがわたしと血のつながつてゐる遠い東京の叔母の家なのであつた。

なくなつた祖父の妹にあたる大叔母は、御家人の娘としてその小柄な身体に一生を独身でおし通

して、七十を過ぎていた。若い方の叔母は大叔母の養女であつた。まだ十八歳のわたしにはこの叔母の年がいくつなのか見当がつかなかった。たぶん三十か三十五、六であつたろう。

この叔母には旦那があつた。しかしわたしにはどこまでも叔母で、男女の肉体的な関係を経験してから後に感じる事ができるようになつたため、かけ、という実感はわからなかつた。

わたしたちのついた最初の日、夕方になると大叔母の方が若い叔母の指図で、雨のなかを買物に出かけていった。それは彼女の生涯や、自分のほんとうの肉身のものをもてなすためであるかのやうに振る舞う、その気性の強さと結びついて、別に若い叔母に使われているようになかしい義務だとも見えなかつた。

若い叔母は受け口の酒井米子の顔に似ていた。

二

わたしが浅草で金龍館を見てきたことを得意になつて帰つてくると、叔母たちは、浅草へゆきたいというから観音さまへおまいりでもするんだらうと思つていたら、とあきれたもんだという顔をした。「氣をつけないと、ミルクホールに出入りするようになりますよ」と大叔母の言うのに、若い叔母はわたしの味方をするような笑顔になつて、その言葉の意味のわからぬわたしをわきへ置いた叔母たちだけの目顔をかわした。そして彼女たちにとって墮落のはじまりであるかのようなこ

の事件は、旦那の来ない静かな日々話題になった。

ところでわたしは震災のおかげで、大正十二年の秋、金龍館の一座のオペラを金沢で見ることができた。石井漠、高田雅夫、高田せい子、澤モリノなど、田谷力三もいつしよだったかもしれない。

小さなやせぎすの澤モリノが海軍士官になって、水兵たちの閲兵みたいなものをやるところだけが、はつきりと眼にのこっている。

それだけに、昭和十年ごろであつたらうか、オペラなどはまったく遠い過去の夢となつたはげしい世のうつりかわりのなかで、わたしは澤モリノの地方の旅先で亡くなつたという小さな新聞記事、彼女の生涯とは縁もゆかりもない記事ばかりの三面の片隅に見つけてびっくりした。

おなじ大正十二年の秋か冬、これと前後して呂昇も金沢へやってきた。そのころ四高の学生たちでつくつていた短歌会のあつた日、兼六公園のなかの会場から、わたしたち数人はそのまま浅野川の川沿いにある尾山劇場へ出かけていった。

中野重治、後の「日本茶道史」（創元選書）の著者西堀一三、そのころプラトン社の「女性」の懸賞募集に「狐鳴く夜」という戯曲の当選した内方新之丞など、みんな呂昇を聞くということに文学的な見識をひそめているような慎重な空気がわたしたちをつつんでいた。

ぎっしりとつまつた黒い頭のかさなりのずつと先の方の、そこだけこうこうと輝いている光のな

かに、美しい呂昇の顔が、客席の後の方にいるわたしのところまで手のとどくように見えた。からだを前にのり出し、ふつくらとした銀杏返しの前髪がこまかくゆれて両方の手が見台をおさえる度に指のダイヤモンドがわたしの目を射った。

帰りの道で誰かが、呂昇はこれを最後に東京で引退興行をやるのだといった言葉が、意味ふかくわたしの耳にひびいた。震災で焼け出された浅草の人たちは、そのころ日本全国の地方地方をそれぞれ興行してまわっていたのであらう。このあいだ劇団新風俗の高清子に

「東京をはなれたことがありますか」

とたずねたら

「三月九日の空襲のとき小屋が焼けてしまったもんですから、東京にいても仕方ないんで田舎へ疎開しましたが……それきりですね」

と云っていた。彼女はそれまであのはげしい空襲のなかで舞台に出ていたのだ。浅草に住みついている人たちは、終戦後は別として、よほどのことがなければ地方回りはしようとしなかったらしい。浅草にはこういう人たちがでつくり出している根強い空気と落ちつきがあつて、一日も停止することなく何万という人々を歲月のごとくおくりむかえているのである。

金龍館へ行った日の翌日であった。

わたしと兄は品川の親戚へあいさつにいった。その家は省線か海岸線の電車か、その線路にそってごたごたと密集している長屋のなかにあった。わたしたちの祖父の弟がなくなった後、まだ卅代の後添いの叔母は、ここへ移って明治製菓へ働きに出ていた。

東京の叔母の家ではチョコレートがいくらでも食べられる、と聞いたのは、その頃のこと、田舎ではまだ見たこともないチョコレートが食べられるという意味が、ここへ来てはじめてわかった。

入口のすだれの外でしりごみしているわたしたちを、むりに一間きりの部屋へあげておいて、叔母はあわてて小走りに出てゆき、みつ豆を二つ手にもってきた。

先妻の息子はもう小学校を出て工場へ行っていたが、彼女はこのわたしたちと血のつながっている息子を会わせたがった。そして背をかがめてわたしたちを見あげるようにして、はじめて一と目会っただけのわたしたちを、竹さんが竹さんがとただ一筋になつかしがるのであった。

焼け杭の柵のこわれた、ほこりっぽい線路沿いの道を、叔母は遠くまでおくってきた。竹さんとわたしたちの父のことで、医者になるために東京へ出てきて、いまの日本医大の前身である済生学舎に通っていた父を、彼女は何年間か世話したのである。

その父はちょうど今のわたしたちとおなじ年ごろであった。そして父は前の年の九月、つまり半

年前になくなったばかりである。

わたしたちは彼女がもどってゆくのを一度もふりかえらなかつた。縁もゆかりもない彼女がどうしてそんなに自分たちの父をなつかしげらねばならぬのか、そのなつかしさを自分たちに押しつけてくるような不思議さと、それを受けかねる氣の毒だけがわたしの心にいつまでも残っていた。そしてそれきりわたしは彼女の消息を聞いたことがない。……

麴町の叔母の家へもどると、ハハキトクスグカエレという電報がきていた。家には十二の妹と四つと三つになる年子の弟妹だけしかいなかった。

東海道線の藤沢、大磯あたりは雨に濡れたやわらかい砂地のうえに桃の花が咲きみだれていた。わたしたちは走りゆく窓の景色にわたしたちのかさなる身の上の変化をとけこむようにまかせていた。静岡の小さな田舎の駅におりると、まさか、をくみあわせた定紋入りの提灯がいくつかむかえにきていた。

一里の道は、ふりつづく雨のなかにあまえるようなかわずの鳴き声が、まっくらな両側のたんぼのつづくかぎり、わたしたち一行の沈黙を満たしていた。ときどきわらじの足音が、起るべき事柄にむかつてわたしたち一行をうながすように耳についてきた。

通夜の朝、縁がわにでて新聞をひろげていると、浅草大火の記事が出ていた。はるかに東京をながめるかのように、目の前に赤い焰のもえひろがる写真の上に目をおとしていた。

西洋人形のかつこうをして、両手をひじから先だけ上にあげ、手の平をもみじのようにひらき、大きな紅いリボンをつけて、すり足できざみに歩いたり、ピョンとはねてしゃがんだり、歌にあわせてからだを左右に振ったり……あの丸ぼちやの、足の太い、色白の踊り子。

この三日前に見た姿、それだけがそのとき見たオペラのたった一つの記憶として今もわたしの目にあざやかである。あれは有名な踊り子であったが、どうしても名前が思い出せないでいた。——そのようにわたしの記憶からまったく消え去っていたが、あれは木村時子であった。そして驚いたことには今も彼女は浅草へ出入りしており、彼女の娘が三十年前の母親と同じように浅草の舞台に出ている。

四

あくる年の春、わたしは金沢で四高の試験を受け、その足で信越線をまわって二度目の東京に出た。

夜行の汽車は、わずかに窓のあかりで線路のうえの雪だけをぼんやりと照らしているだけで、確氷の峠から夜明けの関東平野にくだるまで、夜の闇にとざされた深い雪のなかをはしりつづけた。

このながい雪国の汽車の旅はわたしにとってはじめてであったが、それはまたとり残された四人の兄妹とともに、やしなうもののいない生家をちりぢりにはなれ、ふたたび帰るべき生家をもつこ

とのでなくなつた。わたし自身の人生へのはじめてのひとり旅でもあつた。

汽車は両側に降りつもつてかたまつた雪の土手にとどき車体をものうきしらせながら、うつらうつらと窓にもたせているわたしの頭に走りなやんでいる音をじかにひびかせた。

万一の場合を考えて受けた北海道帝大予科の試験がすむと、わたしはまた浅草へ出かけていった。しかし特にオペラを見ようとも思わなかつた。わたしは土産物を買わねばならない。それを買つてしまふまでは安心出来ない。何を買つたらよいかが心配なのではなく、それが彼女のためのものなので、学生であるわたしにとっては不似合な女物だからだ。

その正月に町の娘たちが花櫛をさして羽根をついているのを見たのを思い出して、子供のような娘のいる一軒の店の前につゝたつた。その花櫛をくれたかわいい箱をさらにきれいな紙で包んだのをふところに入れると、それを上からそつとおさえて、さてわたしはもうどこへもゆくところがなかつた。

仲見世のすぐ裏の通りから曲馬団のジンタがきこえてくる。「天然の美」を耳にしながらその前へいつてみた。

陳列品みたいに小屋の前にならんでいる馬たち、それに乗っているずんぐりとふとりかたまつたあくどい化粧の娘たち、ずっと見上げるような高いところで化粧などしている娘たち、それらは田舎でも見たことのあるものと少しもちがわない。わたしはやかましい呼びこみの声のなかをはいつ

ていった。

うそかほんとかわからないが、フランスはパリで修業したという日本にはじめての空中大飛行、それはたしかに空中の妙技だが、その妙技そのものよりも、その妙技のスタイル——つまり完全に己の肉体とその運動を支配し、運動の展開される空間にたいして、絶対の敬意を表しているかのときエチケット——それが妙技であればあるほど彼女を神聖なものに思わせずにはおかない、そのことがわたしを見物人ではなくしてしまった。……

地上のいかなる土地にもサーカスだけが現出することのできる巨大なテント建築、一瞬にして現れ、たちまち跡かたもなく何処かえ消え去る布きれの建築物、人間と動物の一团。

円形の舞台をめぐる傾斜する客席から見あげる天井は、大木の根本から仰ぐ梢の白雲のごとく高く広く、巨大なテント建築はわずかな風にも巨体のすべてを一時にあおらせ、その大波のようなあおりにのってジンタのラッパは何ものかをそるかのようによいよ高く鳴りわたる。

しかし彼女の妙技はまったく下界のうえに孤立している。

五

彼女が地上においてかろやかに四方の見物席に感謝のあいさつをおくったとき、わたしははじめて自分の心の状態を知った。

すらりとした背だけ、運動そのものによって形成された強いなめらかな四肢の線、飛躍の力がそのままとけこんだ柔軟なふるまい……もちろん彼女は一年前に四十でなくなったわたしの母より若い。

けれども彼女の高い額、どんなに動作や表情がかわっても、長いまつげにじっと沈んで黒目がちに光っている知的な眼、鼻のわきの深いきざみの下にやわらかくすぼまった顎、そのさきの丸い顎によく似合った小さな口もと……彼女の顔は富士額にちかい生えぎわのうえに自然に日本髪を想像させる――

わたしは彼女がふたたび舞台に出てくるのを待っていた。

ただそれだけをあてにしていた。けれどもいつか最初に見た自転車の曲乗りがはじまった。

彼女はついに二度とあらわれなかった。

わたしは外へ出た。仲見世は、浅草はもうわたしの旅先の見知らぬ土地ではなかった。母をうしなった後の気持がいつかわたしをとらえていた。

ああわたしのふところには土産の花櫛がはいっている。わたしは春子を思うよりほかはない。

彼女はわたしを待っているのだ。

まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思いきり

それが頭の中にかんでくる。

うかんではいつか上の空になる。空中飛行の彼女の、あの知識人的なのは、何なのだろう。

彼女はほかの娘たちのような化粧をしていなかった。薄化粧が沈んだあおみがかった素顔の彼女をひきたてている。彼女が一座のヒロインであることはわかる。しかしただそれだけだろうか。知的なものがヒロインであることをかえってかなしく見せている。

あの冷たいあおずんだ肌からぬぐいさることのできないニヒリスチックな陰影は何なのだろう。その陰影は彼女の素顔を一そう素顔にして見せた。その顔はゆきずりの彼女とわたしの心とをへだてるなにももない。

気にかかつてならないのは、そのニヒリスチックなものにちがいない。母親の顔と並べてまだなまなましく思い出される父親を、現実にはもはやそこに見出すことのできない母親のひとりきりの顔、なくなる前の母親が心のなかで必死に堪えることでたかっていたものを思わせずにはおかない顔つき、堪えれば堪えるほどたかいは深身に内攻してゆくよりほかない沈黙の人生——その母がなくなったばかりの今のわたしにとっては、母へのいたわりは同時に思慕の情にほかならなかった。

空中飛行の彼女にたいするわたしの気がかりは、このいたわりだ。それが母親への思慕でないとうして言えよう。

——それから三年後、わたしはまったく偶然に思いがけない時と所で彼女の素姓を知ることができた。

六

この二度目の上京はわたし一人だった。そしてわたしはもう中学生ではない。

叔母の家へついた日、寝るときになると、若い叔母は自分の床をわたしの床とならべてしいた。それから階段のおり口に立って、何かかん高い、当然すぎることにように高びしやな調子で下の大叔母にむかって、わたしの枕をもってくるように言った。わたしは狐につままれたように自分でおりにいった。

大叔母は口をもぐもぐさせながら黙ってわたしに枕を渡し、そのままぷいと横をむいてしまった。若い叔母が他人でありながら、大叔母とは区別された好意をわたしに對してもっている。それを示そうとしているのだ。という気持は後味の悪いやましさにかわっていった。

去年の春は、清水谷公園へ散歩にいったとき、山の方へつづら折りの小径をのぼってゆくと、繁みのかげに女学生と大学生が肩をかさねるようにして座っているのにぶつかった。ふうわりとひろ